

Title	書評：松尾浩一郎著『日本において都市社会学はどう形成されてきたか：社会調査史で読み解く学問の誕生』ミネルヴァ書房、2015年
Sub Title	
Author	石井, 清輝(Ishii, Kiyoteru)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.131- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：松尾浩一郎著

『日本において都市社会学はどう形成されてきたかー社会調査史で読み解く
学問の誕生』 ミネルヴァ書房、2015 年

石井 清輝

本書は都市社会学に限らず、社会調査、社会学史に関心を持つ研究者の必読文献である。本書の内容はタイトルに要約されているように、「日本において都市社会学はどう形成されてきたか」を、その黎明期から 1960 年代の確立期までに取り組まれてきた調査活動と関連づけながら明らかにしていくものである。本書は社会学史／調査史のスタイルを取りつつも、明確な問題意識に基づく歴史像＝物語の展開を軸とすることによって、学史が陥りがちな概説的・教科書的な記述を回避することに成功している。

本書を貫く問題意識は、「市民意識アプローチに特徴づけられる日本都市社会学は、学問としての体系を築くことと引き換えに、都市社会学として望ましいはずのさまざまな要素を手放すことになったのではないか」、あるいは、「異なるアプローチにもとづく別の都市社会学の存在を許容し、時にはそれを取りこんでいく余裕を持ち得なかったのではないか」(p.288)という疑問である。著者のこのような問題意識は、今日の視点と関心から学問の系譜を拮定した上で、完成品として名高い成果物を評価し位置づけていく通例的な社会学史とは異なる視角を要請する。それが、同時代の視点に寄り添いながら、「今日に続く学問の系譜や現在の学界の枠組に必ずしもとらわれずに、その当時に行われていた社会調査や社会観察の営みをひろく掘り起し、評価していく」(p.20) 社会調査史の視点と方法である。

著者が社会調査史の方法によって救い出そうとするのは、かつての都市研究が有していた「ポジティビズム (positivism)」という「姿勢」である。コントの思想に端を発し、通常「実証主義」と訳されるこの言葉は、「実」実際のデータで「証」明するというニュアンスに概念が矮小化されて論じられてきた。しかし、「ポジティビズム」はより大きな文脈の中で生まれた言葉であり、それに応じた意味の広がりをもっている。著者は、さまざまなドグマや困難を排してでも積極的に現実とじかに向き合っていこうとする姿勢、動機に着目し、「積極主義」という訳語を採用している。本書において取り上げられる数多くの調査事例は、「その研究内容や知見に意義があるからというよりも、その調査活動が積極的に社会的現実に向き合い学問を深めていこうとしていたという姿勢じたいに意義がある」(p.8) という「積極主義」の基準によって選ばれている。本書のこのような視点が、類似の研究とは異なる対象の広がりや議論の展開を可能に

石井清輝「書評：松尾浩一郎著『日本において都市社会学はどう形成されてきたかー社会調査史で読み解く学問の誕生』」

『三田社会学』第 21 号 (2016 年 7 月) 131-134 頁

している。

本書の構成は以下の通りである。第 1 章「学問形成過程からの再発見」で、異質性認識から自己認識へという都市社会調査の大きな流れ、「ポジティブズム」の系譜への着目と社会調査史の視角を確認した上で、第 2 章「日本都市社会学以前の都市社会調査」、第 3 章「黎明期の日本都市社会学とその周辺」では、都市社会学の生成に先行する都市社会調査や隣接領域の調査研究、関連学会の動向が幅広く論じられている。第 4 章「社会的実験室としての東京」では、奥井復太郎の都市研究に照準をあわせ、奥井個人の生活史と東京体験に深く分け入りながら、都市社会学のパイオニアとしての学問構想を可能にした要因を探っていく。第 5 章「都市社会調査の戦前と戦後」は、戦前の奥井と戦後の近江哲男の鎌倉調査を比較することで、戦前の研究成果の継承と断絶を検討し、あわせてその後の都市社会学が抱え込んでいく困難が予示される。

第 6 章「戦後の都市研究と総合調査」は、1950 年代の総合調査とそれにもとづく総合的な都市社会認識の試みが挫折していく過程を、日本都市学会の調査活動を検証する中から明らかにしていく。第 7 章「調査プログラムとしての人間生態学」、第 8 章「日本都市社会学の形成過程と市民」では、シカゴ学派の人間生態学の導入と再解釈、さらにそこからのアーバンイズム論への転回と市民意識調査法の確立による「日本都市社会学」の誕生の時が描きだされる。第 9 章「あり得たかもしれない都市社会学」において、湯崎稔の爆心地復元調査の取り組みの中に、「日本都市社会学」から排除されてきた調査手法である社会踏査の可能性を見出した上で、第 10 章「日本都市社会学の確立とその後」で結論と今後の課題が示されている。

本書が示す歴史像は論争的なものであり、日本の都市社会学が抱える問題をどのように捉えるのか、そしてその問題を克服する方向性をどこに求めるのかによって、議論の方向性は大きく分かれてくるであろう。ここでは、あくまでも評者から見た本書の意義を指摘し、あわせて発展的に議論されることを望むいくつかの論点を提示していきたい。

本書の第一の意義として、取り上げられる広範な調査事例に対して、綿密な資料収集に基づく説得的な解釈が提示されている点があげられる。特に第 2 章から第 5 章については、関連する歴史的資料が丹念に渉猟されており、著者の歴史家としての資質がいかに発揮されている部分であるといえよう。評者もそれらの調査事例が有する可能性を強く印象づけられ、参照されている資料に直接あたり、さらなる検討を試みたいという誘惑にかられ続けた。さらに第 6 章以後についても、同様の資料分析に加え、インタビュー記録も採用し、調査史研究に新たな解釈を提示することに成功している。

第二に、本書の歴史叙述としてのバランスの取れた公平な視点も特筆すべき点である。明確な問題意識を基点とした歴史叙述は、その物語に適合的な事実の採用と、それと裏返しの、異なる歴史像や事実への一方的な断罪に陥る危険性を有している。それに対し本書からは、調査者の所属や主義主張に係わらず、積極主義の志向性を有する研究への深い敬意と共感が一貫して感じられる。例えば、都市学会の調査実践（第 6 章）や、人間生態学を基盤とした研究群（第 7 章）を評価しつつも、それらが「失敗」に終わらざるを得なかった要因を詳細に論じること

で、批判の対象でもある市民意識調査にもとづく都市社会学の確立が、当時の学問的状況の中で見れば一つの達成であったことが逆説的に浮かび上がってくる。本書ではそれぞれの調査研究の到達点と限界が公平に論じられており、著者の対象への深い理解と共に、学問の形成過程を検討していく上での社会調査史という視点の有効性の見事な証明となっている。

第三に、1960年代以後に退潮していった調査手法である社会踏査が有する可能性の明確化である。著者は「日本都市社会学」の特徴として、①地理的秩序よりも社会過程を重視、②古い調査技法や事例研究の排除とサーベイ調査への全面的依拠、③個人単位のデータをもとにした統計的分析の採用、という3つをあげ、特に都市社会を「面」で捉える視座を失ったことの問題を繰り返し指摘している（p.292）。それに対して著者は、都市社会学の重要なルーツの一つである社会踏査の復権を訴える。その方向性は、原爆により破壊された地域社会の人間関係や記憶をくまなく復元していった湯崎稔の調査事例（第9章）の検討から浮かび上がってくる。この点が、本書を歴史叙述にとどまらない、これからの都市社会学に向けての力強い提案の書としている。

以上の本書の意義は、評者がさらなる展開を期待する論点にも関連している。第一に、本書とは異なる歴史像の可能性である。都市社会学が多様な系譜を有するものである以上、関心のありかによって、取り上げられる調査事例も、その評価軸も異なった歴史を描くことが可能であろう。藤田弘夫（「都市社会学の多系的発展」2002年、「P・ゲデスと都市社会学の発展」2005年）のように、都市社会学に「都市計画」や「社会福祉」との接点を求める場合、調査事例の重点や研究者の評価が異なるだけでなく、求められる調査の方向性も異なってくるはずである。都市社会学の多系性に応じた多様な歴史＝物語を本書のように丁寧に描いていくことで、今後継承、発展させていくべき有用な「資産」をさらに豊かなものにしていけるのではないだろうか。

第二に、読者としてはやはり本書で描かれた物語の「その後」が気になってくる。「日本都市社会学」の確立以後、そのあり方への批判や捉え返しの動きは断続的に生まれてきた。本書で触れられている新都市社会学や生活史研究以外にも、例えば1970年代以後の都市人類学的な研究群（特に祭礼研究）には、「積極主義」の姿勢に加え、都市という巨大で複雑な対象に、地域社会というミクロな領域の調査によって接近しようとする果敢な挑戦を読み取ることができるだろう。調査論に関しても、技術的な発展が見られるだけでなく、調査という営みそのものの意義や調査者・被調査者関係についての根源的な問いが、社会学の内外から投げかけられてきた。本書の問題意識を基点に、隣接領域にまで視野を広げて「その後」を論じていく作業は今後の重要な課題となるだろう。

第三に、「都市社会学」という学問を構成する論理についてである。評者も第9章で論じられている、都市社会調査における社会踏査の可能性には全面的に賛同する。しかし、その記述的な成果を「都市社会学」の枠内に位置づけることには躊躇を感じてしまう。それは、爆心地復元調査が有する意義は疑いないとしても、そのアプローチを吸収した先にある「都市社会学」

の姿を、評者自身どうしても明確に描くことができないためである。学問分野としての実態が「蒸発」していると言われる状況の中、有効な調査手法に加え、「都市社会学」を構成する根本的な原理を再考し、再形成していく作業も必要とされるのではないだろうか。

とはいえ、これらの論点は本書でも十分に意識されており、その方向性が示されている。さらに、ここでは紙幅の都合で触れることができなかった幾多の重要な問題提起が、本書の中で「静かに」しかし鋭くなされている。著者のこれらの問題提起に呼応し、学問のあり方の反省的な捉え返しと、「あり得たかもしれない都市社会学」の模索が広がっていくことを心から期待したい。

(いしい きよてる 高崎経済大学地域政策学部)